

シンガポール日本人学校における学習指導と実践

前シンガポール日本人学校中学部ウェストコースト校 教諭
千葉県習志野市立第二中学校 教諭 鈴木 建 史

キーワード：シンガポール、在外教育施設、英語教育、国際交流、教科指導

1. はじめに

シンガポールへの赴任が決まり、シンガポールの位置すらすぐに答えられない状態だった。シンガポールは治安がよく、日本人学校の子どもたちに最高の教育をするためにも家族の支えは必要と考えるので、家族が安心してすごせたことがよかったと思う。県の代表として、教科指導、生徒指導、学級指導に全力を注ぎ、学校だけでなく、日本人会主催の行事にも参加し、地域活動に率先して協力していこうと海外子女教育への高い志を持った。そして自分自身の力量も高め、帰国後は千葉県の教育に還元したいと思った。

2. シンガポールについて

シンガポールについて調べてみると淡路島程の狭い国土で、高い人口密度の先進国ということが分かった。

多民族の都市国家であり人口の74%が中国系、13%がマレー系、9%がインド系である。目覚ましい経済成長でビジネス面でも注目されていて、中継貿易国としても有名である。

現地で実際に生活してみると、人が生活する場所と自然とをはっきりと分け、狭い国土を有効に利用して生活しやすい環境を作り出していた。また、幼少期からの教育に対する意識が非常に高く、シンガポール大学(NUS)は世界大学世評ランキングでも26位になっている。Secondary School(中学校)への進学には統一テストを受け、国が進学先を指定するほどである。観光場所も充実しており、シンガポール動物園は日本のメディアでも数多く取り上げられ、その他にもセントサ島という島ごと娯楽施設になっている場所もある。

3. シンガポール日本人学校の特徴

(1) 学校概要

現在1年生162名(5学級)、2年生173名(5学級)、3年生147名(4学級)の合計482名(14学級)で平成28年度をスタートしている。私が勤務していた昨年度は合計16学級だったので、多少の生徒数の減少が見られる。理由として、決してインター校に生徒が集まっているのではなく、シンガポールへの企業進出の減少、物価の高いシンガポールからの撤退、物価の安いマレーシア、インドネシアへの企業移転などが考えられる。

教員数は日本人スタッフ33名、現地スタッフ8名の計41名で教育活動にあっていた。21世紀を生き抜く日本人として、「豊かな国際感覚を持ち、世界の人々とつながり合おうとする人材の育成」「人としての豊かさ、賢さ、強さを持ち、国際社会の中での自己を自覚し、自分の役割を果たそうとする生徒」の育成を目標としている。シンガポールでは学校での教育環境にも自然を多く取り入れている。シンガポールの教育関連予算は国家予算の26.6%(日本は5.8%)を占め、教育に非常にお金をかけていることがわかる。敷地内には緑を多く配置し、落ち着いたで学習できるように環境整備がされている。日本人学校でも緑化には力を入れ、専門のガーディナーが植物の世話をしている。敷地内の植物については、有名な果物の木を植えるなど生徒の興味を引くように育てていた。また、日本の理科の授業では滅多にできないバナナの木成長記録や、マンゴーの木の観察を行うことができた。

(2) 学校教育活動

①英語教育

教育は全て日本の学習指導要領に準じていて、学習環境・内容はそのままである。英語教育には特に力を入

れており、保護者からの期待が大きい。英語の授業では習熟度に応じた少人数のコース別編成で実施している（Near native、Advanced、Upper intermediate、intermediate）。さらにイマージョン教育を行っている。イマージョン教育とは、教科を日本語だけでなく、現地の教員が英語を使って授業をするもので、美術、音楽、家庭科、体育で行っている。

②国際交流

「サーピスラーニング」と称した現地校との交流を年2回行い、現地校生から中国語を学ぶ機会を設けている。毎回参加希望者が多く、選考をするほどである。さらにRI（ラッフルズ・インスティテューション校）交流会があり、本校生徒は日本のマナーを英語で紹介し、RI校は理科の研究校であるため、その研究発表を英語で本校生に説明する交流会を行っている。

③ICT機器を利用した教科指導

授業はよりわかる授業展開を目指し、ICT（情報通信技術：Information and Communication Technology）教育にも力をいれている。実際私も数学の授業をパワーポイントやデジタル教科書、実物投影機を駆使して授業展開を行った。教室の構造上、スクリーンを用いると黒板が隠れてしまうことが難点だったが、生徒からは文字も大きくて見やすく、何より動きがあったわかりやすかったという感想があった。日本では大型テレビでの活用になるので、黒板も並行して利用していきたい。

④学校生活と生徒指導

学校の行事として、1学期は体育大会、日本人墓地公園清掃、2学期は合唱コンクール、スケッチ大会、野外活動（1年）、職場体験（2年）、3学期は修学旅行（2年）、百人一首大会、球技大会、3年生を送る会と充実している。その他にも、ピロティーコンサート、クリスマスコンサート、スプリングコンサートといった文化部（吹奏楽部、軽音部、ダンス部、有志団体）の発表の場を設け、日々の活動意欲を高めている。

世界の日本人学校全てで同じことがいえると思うが、1年を通して転出入が非常に多い。よって子供たちには「出会いと別れ」を大切にするような指導を行っていた。生徒指導については、指導を要する生徒も少なく、日本語の美しく情動的な言葉遣い、相手の立場を理解して物事を考え行動していくという日本固有の優れた文化を身に付けさせる指導ができた。

4. おわりに

3年間在外施設子女教育に携わさせていただいて、日本の文化や礼儀作法、ゆずり合いの精神などを、行事や道徳の授業を通して生徒へ伝えることができたと思う。また、「わかる授業」を目指して日々の教材研究に力を入れ、率先してICT機器を利用した。視覚的に物事を捉えることができ、授業への関心も高まり、学力の定着を図ることができたと思う。また、自身としても学級通信も頻繁に発行した。3年目には学年主任として、出席簿、各クラスの通信、通知表のチェックなど、多岐にわたる起案のチェックを行った。このように教員として新しい力を身に付けることができた。



美術のイマージョン教育



スクリーンの活用